

宮本先生、武藤先生が、紀要の文章に目を通してくださり、さらにまた国立という東京の端っこの「文教都市」においてになってコメントをくださったことに、あらためて御礼を申し上げたいと思います。

何をどのように論じてみても、このアカデミックな場でものを言っている以上、たしかに、グローバル化と新自由主義の枠内であることに変わりはない。そのことは文学部なき実学の学校に籍を置き研究することそのものの問題でもある——着任して以来、この環境で文学を研究することの意義は何か、意味はあるのか、それでも続けるのか、なんども問いかけてきたし、これからも問いかけ続けることだと思う。これは極めて個人的な、のっぴきならない問いとして、この「文教都市」の「実学」キャンパスにいる限り、わたしにつきまとい続けるものでありながら、同時にそれはグローバル化と新自由主義の中でもがく、ということでもある。

今、わたしがここでもがき続けることの意味を考えるなら、やはりそれは、文化の問題は社会・政治と切り離せない問題であって、文学はそのようなものとしての文化の想像力の実践であると信じるからだろうし、またそれは河野氏の言う「全体性」、また三浦氏が指向する「全体性としての社会性」を、手放したくないということでもあるだろう。

わたしがどうしてもなくアメリカの南部の文学に惹かれて、研究をするのは、かの地の人々が近代としてのモダンと、単純ではない関係を取り結びながらも、最終的に冷戦期の言説と共振するその過程が、戦後教育のなかでかたちづくられる「わたし」に遠く、繋がっているからかもしれない。だからこのあとわたしは、冷戦、あるいは日米安保条約のなかで戦後の日本人が、ほとんど *self-colonization* というかたちで日米関係を元にした戦後主体へとなくなっていくことをつねに考えつつ、南部の文学（あるいは文学的想像力）と、やはり向き合っていくことだろう。もがき続けることで、果たしてぺてん師に脱皮できるのか、はなはだ心もとないけれども。